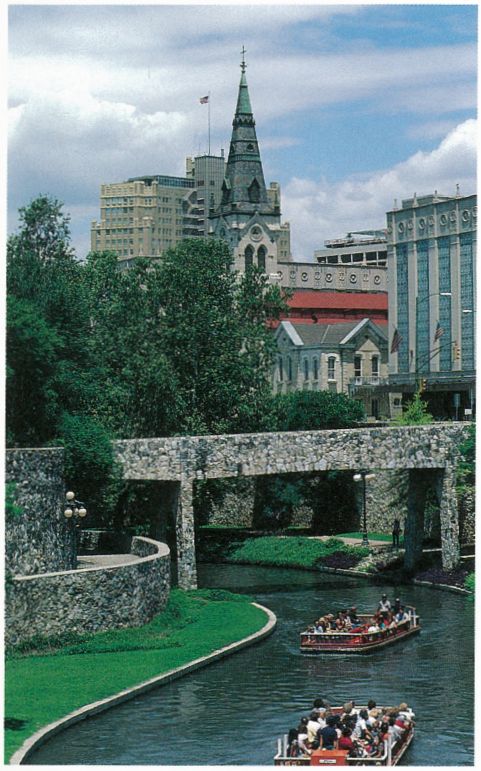
提言＝水辺空間のエンジニアリング

# 新しい水と人間の付き合い方を探って行くために。

これまでほとんど利用されていなかった水辺空間を、人々の快適な憩いの場として活用しようとさまざまな角度から検討を重ねているリバーフロント整備センター。その一周年を迎え、世界的にも著名な都市環境デザイナーである泉眞也先生に、諸外国の水辺空間のエンジニアリングの現状をご紹介いただき、併せて先生ご自身がお考えの水辺空間の開発に当たっての課題や考え方についてご提言いただきました。

語り＝泉　眞也



テキサス；サンアントニオ

## 市民の熱意が実った サンアントニオの リバーフロント開発事業。

水辺を上手に活用して、人々の暮らしや社会整備を進めている事例を多く見てきましたが、その中で私自身がもっとも注目しているのが、アメリカ・テキサス州にあるサンアントニオのリバーフロント開発事業です。ここでは、市民の熱意が素晴らしい観光資源を生み出したという理想的な姿を見ることができます。

サンアントニオ市内を大きく蛇行して流れる川がありました。その川が一九二一年大洪水を起こし、市当局はその対策として、川が蛇行している部分を埋め立てて、新たに川のバイパスを作るという災害対策事業を提案したんです。

しかし蛇行している部分の埋め立てに、市民が大反対しまして、その川の保全をはかりながら川沿いの散歩道をつくり、市民の憩いの場所にしようという気運が盛り上がってきました。しかも市民が自分のお金を使ってでも作りたいという熱の入れようでした。その熱意に市当局も動かされ、全市を挙げての一大プロジェクトになったわけです。

市周辺は砂漠地帯ですから非常に暑いわけですが、この川の水は地下水を汲み上げて利用しているので、散歩道はとても涼しく、また美しい川面にさまざまな店やショッピングセンターのイルミネーションが映える夜景が自慢の景勝地になり、年間一千万人もの観光客が訪れるということです。

さらに、近くのオースチン市と一緒になってショッピングセンターやコンベンションホールを作り、その周辺に一大ハイテク工場団地が育っています。それと同時に、水族館やリバーサイドシアターなどのコミュニティづくりも進んでいます。

このサンアントニオの例は、世界的に見ても、川を扱ったリバーフロント開発事業として出色の事例だといえるでしょう。しかも市民の熱意が行政を動かして街づくりを推進させ、さらに大きな産業までも起こしたという点で、素晴らしい成功例ではないでしょうか。

## 湖畔を市民の レクリエーションゾーンに変えた、トロントの開発事業。

川の水辺空間ではありませんが、湖の水辺を上手に使いこなしている例をあげてみましょう。

トロントは、ご存知のようにオンタリオ湖に面した大都市です。そのオンタリオ湖の沖合、船で一〇分から一五分くらいのところに細い島をつくり、遊園地やヨットハーバーを建設して市民のリゾートエリアになっています。

またモントリオール博覧会の跡地利用として、土地を少し削って湖の水を引き、その水の上にタワーやドーム競技場、音楽堂、劇場など、さまざまな施設を建てています。浅い池では、子供達が水遊びや水難訓練の実地勉強ができますし、コンベンションセンターのある高さ五五〇メートルのUNタワーからの景観は素晴らしいですよ。

ここはちょうど市街地と水辺の中間に位置しているため、暮らしとリゾートをつないでいる要のような役割をもっているんです。その要の位置に産業や文化の中心施設が揃っている。これもまた理想的だといえるのではないでしょうか。

## 環境保全はもちろん、エネルギー問題や教育事業まで一挙に解決したナイアガラ整備事業。

ナイアガラは、世界屈指の大爆布として有名です。その滝が毎年侵食によって後退しているのが問題にはり始めたのは、一九六〇年代だったと思います。滝の侵食を防ぐために、川の上流に取水口をつくり、人造湖に溜めて発電しようと着手されたのが、この環境保全事業でした。

昼間はナイアガラの素晴らしい景色と迫力ある滝を眺めに来る観光客のために、たっぷりとした川の水を流し、夜は滝の水の一部を人造湖に溜めて四五〇万キロワットの発電に利用しています。

ここではまた、副次的ではありますが、素晴らしい成果をあげているのでご報告したいと思います。それは、教育事業への波及効果です。

ナイアガラ爆布は国立公園の中にあり、そのメンテナンスには莫大な費用がかかっていました。それを近くのスクール・オブ・ホリティカルチャー、つまり園芸学校の生徒たち

カナダ：トロント

カナダ：ナイアガラの滝

が引き受けているのです。それをやるから授業料は無料。もちろん水力発電による利益がそれを可能にしているのは言うまでもありません。

授業料がかからないから、全米から才能ある若者が集まります。みんなまじめに勉強しようとしている人材だから、卒業しても立派な園芸家に育っていく。そうした好循環が、この学校の名声を非常に高めているんですね。卒業生は全米から引っ張りだこだそうですよ。

さらにコンベンションセンターを建設して産業の活性化にも力を入れるなど、立体的な事業展開を進めている自治体の努力は、称賛に値するといえるでしょう。

## 国や自治体の力と民間の活力を上手に組み合わせて、大きな成果をあげるために。

次は、国家的なプロジェクトを民間企業の独自性に任せ、個性溢れるリゾートタウン建設に成果をあげている例を見ることにしましょう。

南フランスのラングドックは、世界の一流リゾートといわれるニースと、スペインの観光地をむすぶ回廊をつくろうと着手された一大レジャーランド建設事業です。幅一九キロ、距離二四〇キロに及ぶ広大な湿地帯に、大小さまざまな個性溢れるリゾートタウンが建設されています。

これは、これまで活用されていなかったこの土地を国が買い上げ、道路や下水道などのインフラストラクチャーを整備した後に、民間に払い下げて、レジャー施設の建設が行われた、官民共同のプロジェクトです。

基本的なところは、きちっと政府の指導のもとに行われていますが、個別の事業ではそれぞれの街の個性を活かした方法が優先されています。それが非常におもしろい効果をあげているのでご紹介しましょう。

ある街では、ピラミッドみたいなカタチをした建物ばかりが建ち、また少し行って次の街に入ると、歴史を感じさせる非常にオーソドックスな町並みが見られる。これは全体計画がきちっとしていることを前提に、個別の街づくりをひとりのアーキテクトに任せているから、こうした個性を際立たせることができるのですね。

よく環境デザインというと、全体

特集 INTERVIEW

## 泉 眞也
SHINYA IZUMI

PROFILE

環境計画プロデューサー、環境デザイナー。東京芸大美術学部工芸科卒。大阪万博の基本構想に参加し、筑波・国際科学技術博の基本構想委員をつとめる。

を統一して屋根や外観など、色もカタチも揃えてしまうという話が多いようですけれど、そうではなくて、人間の生活空間のなかにどれだけ多様性が持ち込めるかの方が、実は非常に重要なのではないかと、考えているんですよ。

そして、行政機関の基盤事業と民間の活力やアイデア、工夫などを、上手に組み合わせて、全体として大きな社会的利益を生み出していくという点で、このラングドックの例は凄くいい例だといえますね。

### 水辺の開発も、産業開発から生活開発へと、視点の転換が必要。

従来、開発というと、どうしても産業開発が中心だったわけです。例えば、工場を誘致すれば人が集まり、地域経済が活性化して、そこの暮らしを支えるさまざまな周辺産業が育つという発想でした。

でもいまは、工場を呼んでも人が集まらないんですね。最新鋭の製鉄所というのは、今までの五分の一くらいの人間で動くんです。人がいない方が優れている工場なわけです。

街づくりに工場を誘致して来るのが駄目となると、違ったカタチで街づくりを進めて行かなければならない。そのいい例としてゴールドコーストがあるんですね。

ゴールドコーストといえば、日本でも最近とくに有名になったオーストラリアの東海岸につくられているリゾートタウンです。

ここは、すべてシーサイドリゾートのためにだけできた街だと言っても過言ではありません。

サーフィンやヨットを楽しんだり、リゾートでのんびりと過ごすためにやってくる人たちのためのマンションやホテルが立ち並んでいます。それにここに住もうという人も出てきて、沼地をクリークでつなぎながらプライベートなヨットハーバーが全戸についている建て売り別荘などもできていますよ。

このように休日に海を楽しもうという人が集まるリゾートタウン建設というのは、産業開発型の街づくりではなくて、生活開発型の街づくりだと言えますね。水辺空間を生かしていく、大きな方向として、この生活開発型を目指すのが有力ではないでしょうか。

### ものではなく、生活をつくる、すてきな体験を生み出すことが最大の産業として育つのでは。

日本のウォーターフロントというのは、漁業を初めとした産業のためにつくられてきたんです。でも今は、ものをつくっても世界から怒られるだけで、そうなると情報産業ということになる。すると工場だったところに、情報時代の工場みたいのを建てようとする。情報時代の工場というのは、実はそれは、楽しい生活ができる場所なんですね。

だから昔船をつくっていた造船所の跡地に、レジャー型マンションができるということになるのは当然のことであって、主力商品が変わっただけなんですね。

こういう視点から見ていくと、これからの日本は海辺での快適で充実した都市づくりを真剣に考えなければならないと思うわけです。

ゴールドコーストの開発でも分かるように、二一世紀では、ものをつくるより生活をつくる、そしてすてきな体験を生み出すことが最大の産業としてクローズアップされてくると思うのです。それが二一世紀に向

けての海辺の開発の主要な目的だろうと思うのです。

これを海辺ではなく、内陸でやっているのが、実はディズニーワールドなんですね。

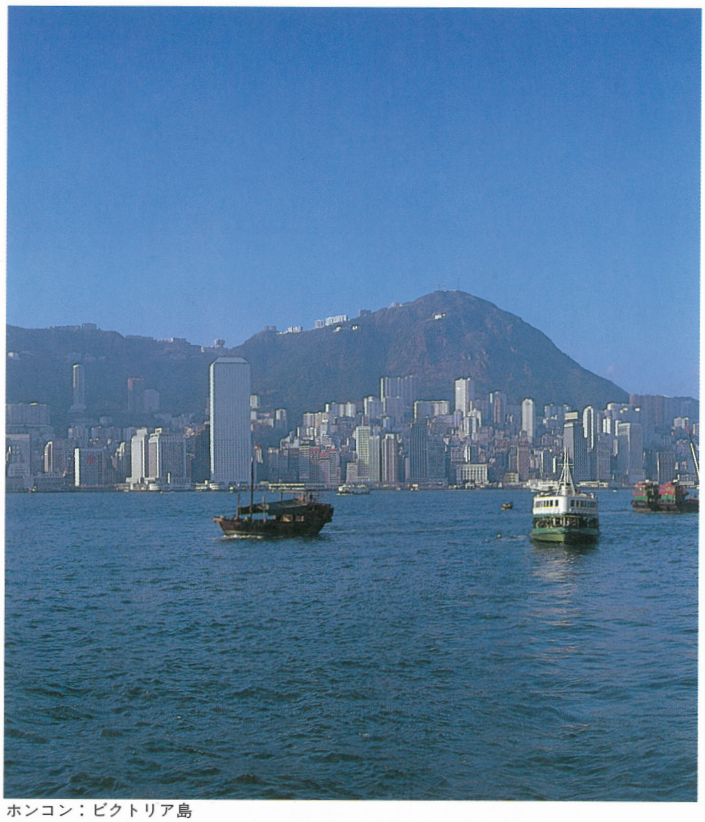
ディズニーワールドには楽しい時間と空間がありますね。それはもちろんなんだけれども、ディズニーワールドの収入源の最大のものは、コンベンションなんです。コンベンションというのは、結局、楽しく情報を生産するための産業装置なんですよ。

だから、そこへ行くと世界的なエンジニアや学者が集まって、最新の情報を披露してくれる。隣に行けば最新の機械が展示してあって、販売員が説明してくれる。商談が進む、というように、新しいタイプの産業装置なんですよ。

けれどもお母さんや子供たちは退屈するから、遊園地で遊んで待っている。ディズニーワールドもこうした仕組みに気付いたものだから、いまコンベンションセンターを一生懸命つくってますよ。

その立地として非常に都合が良いのが、水辺なんですよ。もちろん、それは山や野原でも建てられますが、やっぱり水辺というのは、人間を非常に開放的にするし、陸の楽しみはもちろん水の楽しみもあるし、まさにディズニーワールド的なものが実現できるわけです。

ディズニーワールドはフロリダの産物ですが、フロリダそのものがまさにウォーターフロント開発の最たるものなのですから。


ホンコン：ビクトリア島

## 世界のさまざまな水辺開発を知りながら、日本の実情に即した開発を進めて行くべきではないでしょうか。

日本では、開発というとどうしてもヨーロッパやアメリカをモデルにしたがるようですが、海辺の開発ではホンコンやシンガポールなど、東洋型の水辺開発をもう一度見直すべきではないかと思っているんですよ。

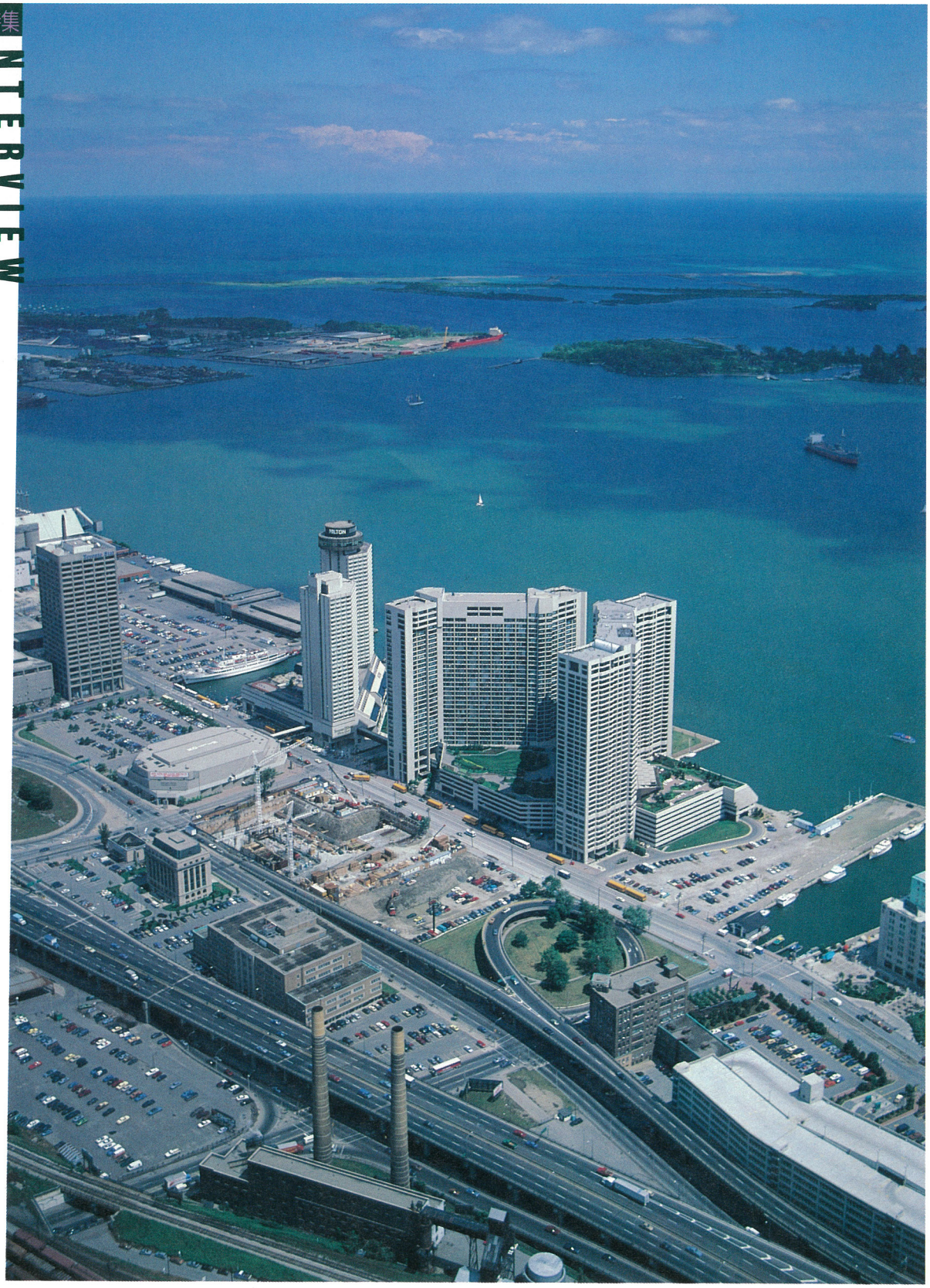
また特定のモデルがあって、それをステレオタイプに考えてしまわずに、世界のさまざまな水辺開発を見詰めながら、日本型のものを探っていくべきではないでしょうか。

日本の海は、ヨーロッパやアメリカの海とは潮の香りひとつとっても違うんです。魚も違うし、海との付き合い方自体が違います。ですから向こうのスタイルをそのままやらないで、施設にしろデザインにしろ、独自のやり方を考えていく必要があるんではないでしょうか。

そういう点で、日本人の参考になるのは環太平洋にはいっぱいあるんですよ。先程のホンコンやシンガポールはもちろん、ゴールドコーストやシドニー、サンディエゴやロスアンジェルス、サンフランシスコ、バンクーバーなど。

それに日本国内でも、函館や金沢、萩、長崎など美しい水辺開発の例はいくつもあります。

こうした実際の開発の姿を広く調べ、学び、そして現代の日本人の知恵を使って、新しい水と人間の付き合い方を探っていくことが、これからのリバーフロント整備センターなどに課せられた一番大きな役割だと思うのです。




カナダ：トロント（湖畔のホテルとオンタリオ湖）